

『ある双子と少女の話』

むかしむかし。あるところに、とても仲の良い双子の兄弟が居ました。兄弟はとてもそっくりで、みんな兄を弟と、弟を兄と間違えてしまうのでした。

「でも、俺たちはお互いを見分けられるから」

「僕たちは、お互いをよく分かっているから」

二人は鏡写しのような顔を見合わせて、傷つくことなく気にすることなく笑います。

あるとき、兄は恋人を作りました。優しい女の子でした。

二人は深く愛し合っていました。その女の子もみんなと同じように兄を弟と、弟を兄と間違えることがありました。

「どうすれば見分けがつくのかしら？」

女の子が尋ねると、兄は笑って言いました。

「そんなことは無理だよ。俺たちは、本当にそっくりなんだから。きつと入れ替わっても、誰も分かりはしないさ。俺たち兄弟以外にはね」

「でも、私が愛しているのは貴方なのに……」

女の子は、すっかり落ち込んで言いました。

兄はそんな彼女をいとおしく思い、女の子の頭を優しく撫でてあげました。

兄は重い病気にかかって倒れてしまいました。どんな薬も彼の病気を治すことはできず、お医者様はもうどうすることもできないと言いました。弟は深く深く悲しみました。兄は言いました。

「彼女には俺の病気のことを言わないでおくれ。悲しませたくないんだ」

「兄さんは、最期にあのひとに会いたくはないの？」

「会いたいさ。会いたいけれど、彼女の涙を見ると、俺の胸は潰れてしまう。」

兄が恋人をととても大切に思っているのが分かった弟は、兄に頷きました。

「決して兄さんの病気のことは言わないよ。信じてくれ」
「ああ。信じているよ」

女の子は、彼女の恋人が姿を見せなくなったことを不思議に思いました。

「どうしたのかしら。何か、良くないことが起こったのかしら。」

女の子は彼に、自分の心配を伝える手紙を送りました。すぐに返事が返ってきたので、彼女は安心しました。

手紙には、彼はとても忙しくして中々会いに行けないことと、文通ならばなんとか続けられるからそれでも良ければ返事が欲しい、と綴られていました。

彼女はすぐに返事を書いて、彼に向けて送りました。

「はやく、またあの人にまた会いたいわ」

女の子は彼の筆跡をなぞりながら呟いて、ため息をつきました。

「兄さん、このまえの手紙のお返事が来たよ」

「そうか。彼女はまだ、俺を愛してくれているんだな」

兄は痩せこけた顔に柔らかな表情を浮かべました。

しかし、すぐに苦しそうに胸を押さえて激しく咳き込みます。

「大丈夫なの、兄さん」

「ああ。……いや、俺はもう長く生きていられない。弟よ、お前を信じて最期の頼みがある。けれど、きつとこれはお前にとって、彼女にとって、あまりにも残酷な頼みになる」

「構わないよ、僕は兄さんの最期の頼みを必ず叶えてみせる」

「ありがとう。すまない。お前のことを、信じているよ」

女の子はわくわくしていました。

だって、今日は久しぶりに彼女の恋人と会える日なのですから。

女の子が待っていると、彼女の恋人がやってきました。

「おまたせ。久しぶりだね、元気かい」

「ええ。貴方も元気そうで何よりだよ」

女の子は、しばらくじつと彼の顔を見つめていました。彼は首を傾げます。

「どうかしたのかい」

「そうだね。ずっと会うことができなくて、寂しかっただろう。ごめんね」

女の子は首を横に振って、笑ってみせました。その日、二人はとても楽しく過ごしました。

それから、二人は何度も会う約束をしました。その約束のとおり、何度も会いました。たくさん言葉を交わして、たくさん笑いあいました。手をつないでキスをして、会う度にお互いを想う気持ちを強くしていきま

た。何年かの時が流れて、彼は女の子にプロポーズをしました。女の子は驚きながら、でもすぐに笑顔で頷きました。

たくさん、たくさん時間が流れていきました。

やがて彼はお爺さんになって、女の子はお婆さんになりました。

二人は小さな家で、とても仲良く暮らしていました。

二人はお互いに深く愛し合って、とても幸せに暮らしていました。

「ねえ、貴方。わたし、貴方のことを愛しているわ」

「なんだい、突然」

「わたし、貴方のことを愛しているのよ」

「よせよ、照れるじゃないか。」

「あら、貴方はそうじゃないの？」

「そんな訳ないよ。おれも君のことを愛しているさ」

彼はしわくちやの顔に、柔らかな表情を浮かべて言いました。

お婆さんは、椅子に座って、一人で窓の外を眺めていました。

「貴方のことも、『貴方』のことも。わたしは、愛していますよ」

だつて、私は『貴方』の愛を忘れていないもの。

だつて、貴方の愛は偽者じゃなかったもの。

貴方は、私のことを愛してくれたもの。

「わたしは、“貴方”の愛を信じているわ」

お婆さんは、にっこりと笑ってみせました。